

第1回

東京大学大学院
理学系研究科附属

植 物 園

(本園)

理 学系研究科附属植物園は、一般に「小石川植物園」と呼ばれ親しまれているが、この名称は、その歴史と深い関係がある。植物園は、年末年始と月曜日を除き有料公開しており、年間12万人以上の入園者がある。以下にその歴史と活動の一端を紹介したい。

沿 革

本 植物園は、東京大学創設にともなう大学附属となったものだが、植物園としては、これからさらに200年近くさかのぼる歴史を持っている。現在の植物園は、白山にある本園と日光の分園からなるが、本園は、徳川綱吉が將軍職にあった貞享元年(1684年)に、子供の頃の綱吉の下屋敷であった白山御殿の跡地に作った薬園(小石川御薬園)を起源としている。明治になって、文部

省博物館の附属となった時に小石川植物園と改称され、日本における最初の植物園となった。その後、明治10年(1877年)4月12日の東京大学創設後間もなく本学の附属となり、理学部の管理する施設となった。このように、本植物園は、日本に現存するもっとも古い植物園であるばかりでなく、世界でも有数の歴史を持つ植物園である。

Information

入園時間：午前9時から午後4時まで。4時30分に閉園。

個人観覧料：大人 330円

小人(小学校児童) 110円

6歳未満は無料

このほかに団体観覧料もあり。

※ 東大の教職員、学生生徒は無料で入園できる(ただし、学生証等を提示することが必要)。

休園日：12月29日から翌年の1月3日および毎週月曜日。ただし、月曜日が祝日の場合は開園し、その翌日が休園日。月曜日以降の日が連続して休日の場合は、それらの休日の翌日が休園日。



施設の概要と魅力

本園は 161,588m² (48,880 坪) の敷地内に本館建物と温室、各種の栽培施設などを持つ教育・研究施設である。正門から坂を登ると左手にまず見えてくるのが本館で、ここには研究室や事務室、標本室などがある。さらに奥に進むと大小の温室があり、ここには熱帯・亜熱帯の植物約 1,100 種が栽培されている。屋外部分は分類標本園、薬園保存園、樹木園、圃場など様々な栽培施設として機能しており、台地・傾斜地・低地・泉水地などの変化に富んだ地形を利用して、約 3,000 種の植物が配置されている。この中には、本館付近のサク

ラヤ、ハンカチノキ、日本庭園のウメやハナショウブをはじめ来園者に人気のある植物も多い。生物学史上有名なのは、精子発見のイチヨウである。理学部植物学教室の画工（後に助手）であった平瀬作五郎が、1897 年にこのイチヨウを研究材料として精子を発見したのである。この他にも、由緒ある植物や遺構がいくつもある。植物園の敷地内には昭和 44 年（1969 年）に本郷キャンパスから移築された重要文化財の「旧東京医学校本館」があり、東京大学総合研究博物館小石川分館として公開されている。

■ 大温室



■ 日本庭園

Koishikawa Botanical Gardens

ムニンツツジ ■



ソメイヨシノ ■

研究・教育活動

植物園は日本の近代植物学発祥の地であり、特に理学部植物学教室が園内にあった明治 30 年（1897 年）から昭和 9 年（1934 年）にかけては、日本の植物学研究の中心であった。本植物園では、現在も植物多様性に関する植物学の教育・研究が活発に進められている。本園の研究室は教員 3 名（教授 1 名、助教授 1 名、助手 1 名）（このほか日光分園に助教授 1 名、助手 1 名）と理学系研究科生物科学専攻に所属する大学院生から構成されている。園内に保有する生きた植物と植物標本を研究資料として活用するほか、国内、海外で現地調査を

行い、様々な手法を用いて植物多様性の解析を行っている。また、植物を特徴づける形態の規則性やその形成機構の解明を目指した研究も行っている。生植物から DNA を抽出し、系統進化の研究に用いることも、植物園における重要な研究手段として用いられている。

植物園の教員が担当する学部学生の実習も本園や日光分園を利用して行われている。植物学の教育・実習で最も基本的かつ重要なのは、地球上の植物多様性を体験的に学び、進化について理解することであり、植物園はそのための理想的な施設と考えられる。

ツバキカズラ ■



研究施設としての利用と社会的貢献

植 物園で保有する 4,000 種余の生きた植物は随時教育・研究に提供されており、特に、温室内で育成されている Amborella や Gnetum といった植物は、数多くの研究に利用されてきた。また、本館には約 70 万点の植物標本（東京大学総合研究博物館の植物標本とともに東京大学植物標本室を構成し、全体で約 150 万点）と、植物自然史関連の図書約 2 万冊があり、東アジア植物研究の世界的センターとして内外からの多くの植物学研究者に活用されている。

植 物園の入園者は、必ずしも植物観察のために来園しているとは限らないが、その場合でも、園内で意識、無意識のうちに植物に触れ、アカデミックな雰囲気の中で多様な植物を観察する

ことにより、植物について理解を深める機会となることを願っている。大学における教育・実習に関する事項のほとんどは植物や自然に関心のある入園者に対する社会教育にも当てはまるものであり、積極的に利用すれば無限の価値を持つ施設である。本植物園では、小石川植物園後援会の助けを得て、パンフレットや植物名ラベルの整備に特に力をいれている。名前の正確さを期すため、また、外国人にも理解しやすいように、植物名ラベルには和名と学名を併記し、重要なものに関しては植物学的な説明も掲示している。その他、植物観察会や植物学に関する植物園市民セミナーも積極的に行い、植物に対するより深い興味と理解を広めることを目指している。

課 題 と 展 望

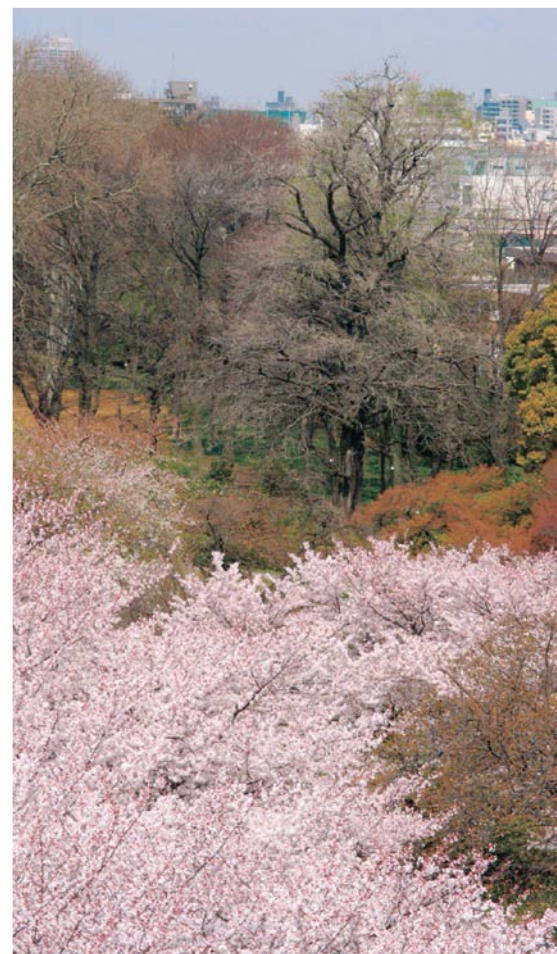
地球環境の維持に不可欠な植物多様性の保全に取り組む

地 球の持つ独特の環境と生物多様性は人類が健康に持続していくために必要不可欠のものである。しかし、環境の激変している現在の地球からは、日一日と種が失われつつあるといわれ、生物多様性を保全することが急務である。生きた植物を収集管理し、またこれについて研究する能力を備えている植物園は、世界的に、植物多様性保全に最も直接的な役割を果たすべき施設と位置づけられ、植物園自然保護国際機構（BGCI）などによって世界的な活動が推進されている。本植物園は野生植物種を我が国でもっとも多数保有する植物園（日光分園を含む）であるばかりでなく、種の保全にも実績を持っており、たとえば、20 年にわたる小笠原諸島の絶滅危惧植物の保護増殖

事業は高く評価されている。このように、本植物園は、活動のリーダーとなるべき施設であり、構成員一同、推進に努力している。

バイオリソースの収集と温室改築の必要性

温 室は、研究資源および将来の遺伝子資源として生きた植物を収集し、系統保存を行い、絶滅危惧植物の保護増殖を進める上で、植物園にとって不可欠の施設である。現在植物園が抱える大きな課題の一つは、40 年前に建設された大温室の老朽化が進み、危険であるばかりでなく、いつ機能が停止してもおかしくない状態にあることである。植物園を活用する上でその改築を実現させることが急務の課題といえる。



■ 植物園本館の屋上から見たサクラと精子発見のイチョウ

東京大学小石川植物園から英国大使館へ、アマミセイシカ（奄美聖紫花）贈呈

半蔵門に有る英国大使館は約1万坪。瀟洒な公邸などが樹木に囲まれ都心とは思えない静寂の中に佇んでいる。

館内の庭にはエリザベス女王陛下、チャールズ皇太子殿下の記念樹があり、今年3月、アマミセイシカが仲間入りしたのである。

2004年7月に着任されたグレアム・フライ大使夫人、豊子さんが、12年振りの東京生活で最初に訪れたいと願っていたのが「小石川植物園」であった。

「研究機関ということに関心がありました。昨年11月にお訪ねしましたところ、専門家の情熱が伝わる想像どおりの心やすまる緑の園でした」

その後、邑田教授と私が大使館に招かれた折、ふと樹木贈呈の話をおふた

りにしたことが、交流の中で実を結んだのである。

「日本固有の樹を」と邑田教授が選んだのが「アマミセイシカ」。

偶然にも今年2月に夫妻は、大使の趣味であるバードウォッチングと夫人の植物探訪で奄美大島へ。島にはエジンバラ公フィリップ殿下の記念樹もあり、いくつものご縁に夫妻は深い感慨を覚えたそうである。

巨木に強く惹かれるという豊子夫人は英国の「キュー植物園」、「王立園芸協会」のメンバー。今回「小石川植物園後援会」にも入会された。

また、夫妻は昨年8月、中禅寺湖畔の大使館別荘滞在時に「日光分園」をふらりと訪れている。

植物分類学の先進国である英国には、

過去に植物園第三代園長も留学。以来、東京大学植物園とは密接な交流が続いている。

「庭師の国民」といわれる植物愛好国の英国と四季折々の植物に恵まれた日本。

「大使館にとり歴史的なことです」と感謝の意を寄せる夫妻。

緑は「双方の友好」という結実を生んだ。

(文責：内田みさほ)

内田みさほ

アート・コーディネーター。出版企画。小石川植物園後援会員。現在ミサワホームとのジョイントで園内の記念館リフォーム担当。友人の駐日英国大使夫人フライ豊子さんを、邑田教授に紹介したことから樹木贈呈が実現。



■ フライ大使夫妻と邑田仁前植物園長

今年開花したアマミセイシカ ■



新連載シリーズ開始のご挨拶

今年度は、理学系研究科・理学部の施設のうち、本郷キャンパスの外に点在する6ヶ所を順に探訪するシリーズをお届けします。6ヶ所とは、どこでしょうか？ そう、理学系の内部の方でも、すぐに列挙できないのではありませんか？ 日頃、とかく本郷中心に考えがちですが、これらの施設はそれぞれ深い歴史と特色を持ち、研究と教育の重要な一翼を担っています。初回は新緑の候にふさわしく、小石川の植物園です。

広報誌編集委員長 牧島 一夫